

# 「グローバル・パートナーシップ」を育成する 希望創造型教材の日米協働開発 ～「平和を願った二人の少女の物語 一禎子とヒロ子～」～

小原 友行\*

The Development of Hope-Creating Instructional Materials in Multi-Cultural Study to Advance “the Global Partnership” through the Japan-US Collaborative Action Research: Using the Story of Two Japanese Girls, Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama, Who Wanted Peace

Tomoyuki KOBARA\*

## ABSTRACT

This research aims to develop teaching materials that reflect multi-cultural issues. These are considered to be effective in fostering “the global partnership”, one of the qualities and abilities required in the rapidly evolving global era. The method, known as “collaborative action research”, was carried out between Japan and the USA. Specifically, this paper reports on an attempt to develop the hope-creating instructional materials and lesson plans related to the stories of two Japanese girls, Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama, who wanted Peace.

キーワード：「グローバル・パートナーシップ」、多文化間理解学習、教材開発、NIE（教育に新聞を）

## 1. はじめに～本研究の構想と本小論の位置づけ～

本研究は、急速に進展するグローバル時代だからこそ求められる資質・能力の一つである「グローバル・パートナーシップ」を育成するために有効と考えられる「多文化間イシュー教材」を、日米間での「協働的アクションリサーチ」という手法を通して開発することを目的としている。そのため、本誌第6号の前稿においては、「グローバル・パートナーシップ」を育成する「多文化間イシュー教材」には、「相互交流型」「希望創造型」「対立・葛藤型」の3種類が考えられ、2018年度の研究成果として、その中の「相互交流型」の教材として、「幕末の日米交流物語—万次郎とマクドナルド—」を開発し紹介した<sup>1)</sup>。本稿は、それに引き続いて、2019年度の研究成果として、「希望創造型」の教材として「平和を願った二人の少女の物語—禎子とヒロ子—」を開発しようとするものである。

本小論においても、前稿と同様に、「協働的アクションリサーチ」という実践研究の考え方に基づいて、下記の方法・手順で研究を行っていった。

- ① 前稿で紹介した、日米協働のチームで構築した「グローバル・パートナーシップ」を育成するアクティブ・ラーニング型の多文化間理解学習に関する理論仮説に基づいて、「希望創造型」の「多文化間イシュー教材」の日本語版・英語版を、日米協働で開発する。

---

\*大学教育センター兼任教員・人間文化学部教授

- ② 開発した「希望創造型」の教材を用いた研究授業を、日米両国の小学校の最上級学年で筆者自身が試行する。
- ③ 試行した研究授業の結果の分析・評価を、日米協働研究チームで行う。
- ④ 試行した研究授業の分析・評価に基づいて、開発した教材および授業計画の修正・改善を図るとともに、理論仮説の有効性を吟味する。

なお、本小論のために協力していただいた2019年度の日米の協働研究チームのメンバーは、下記のとおりである。

- ① サンドラ・ウォーレン（イーストカロライナ大学教育学部教授）
- ② ジョン・タッカー（イーストカロライナ大学歴史学科教授、アジア研究プログラム代表）
- ③ トーマス・クーパー（ノースカロライナ州ローリー市のリーディークリーク中学校副校長）
- ④ コーリーン・バート（ノースカロライナ州グリーンビル市のエルムハースト小学校校長）
- ⑤ ミスティ・ラフィフ（ノースカロライナ州グリーンビル市のエルムハースト小学校5年生教諭）
- ⑥ 石井信孝（広島大学附属三原小学校副校長）
- ⑦ 村上忠君（広島大学附属三原小学校6年生教諭）

## 2. 「希望創造型」教材開発の理論仮説と特質

### (1) 理論仮説としての目標・教材・学習活動の考え方

前稿でも紹介したように、「グローバル・パートナーシップ」を育成する多文化間理解学習に有効と考えられる「多文化間イシュー教材」の開発に向けた理論仮説の要点は、次の3点である。

- ① 目標としての「グローバル・パートナーシップ」
- ② 教材としての3種類の「ストーリー」（物語）
- ③ 学習活動としてのNIEを取り入れた「アクティブ・ラーニング」

①については、本研究においては、平和な国際社会を実現しようとする意欲や意識をベースに、その実現に向かって7つの「C」である「キュリオシティ（好奇心、Curiosity）」「コミュニケーション（対話、Communication）」「コラボレーション（協働、Collaboration）」「クリティカルシンキング（批判的思考、Critical Thinking）」「クリエイション（創造、Creation）」「チャレンジ（挑戦、Challenge）」「チョイス（選択、Choice）」を行うことができる資質・能力と定義している<sup>2)</sup>。

②については、「相互交流型教材」「希望創造型教材」「対立・葛藤型教材」の3種類を考えている。「相互交流型教材」とは、文化間での相互交流の活動を通してウイン・ウインの関係を構築する（した）人間の問題解決の「ストーリー」（物語）である。「希望創造型教材」とは、新たな価値の発見や再構築によって未来への希望を生み出そうとしている（した）人間の問題解決の「ストーリー」（物語）である。そして「対立・葛藤型教材」とは、文化間での対立やジレンマを克服しようとする（した）人間の問題解決の「ストーリー」（物語）である。これらは、未来の希望創造に向けた一つの物語となっていることが教材としては重要であろう<sup>3)</sup>。

③については、学習者が「新聞記者（ジャーナリスト）」として時空を超えて人物に出会い、彼らが持つ「ストーリー」（物語）を取材し、それを新聞記事として発信するという、NIE学習の基本である「情報の受信」「情報の読解」「情報の発信」を行うような学習活動を取り入れることである。すなわち、教師が用意した資料等から必要な情報を取り出す「情報の受信」、その情報の背景を分析・解釈する「情報の読解」、そこから引き出された意見や考えであるメッセージとしての情報をクリエイティブに生み出す「情報の発信」の3つの活動である。

### (2) 「希望創造型教材」としての本教材の特質

本小論で開発した「希望創造型教材」としての「平和を願った二人の少女の物語—禎子とヒロ子—」の授業は、目標・教材・学習活動について、具体的には次のような特質を持つプランとして開発した。

目標については、二人の少女の物語から、学習する主体である子どもたち自身が未来への希望を見

出すような力の育成を重視した。佐々木禎子さんの場合は、実家に残されていた小さな折り鶴が、憎しみや悲しみの連鎖を断ち切り乗り越える強さややさしさを伝える象徴という新たな価値を生み出し、遺族によって米国をはじめ世界の追悼施設に贈られている、という物語である。楳山ヒロ子さんの場合は、負の遺産である被爆建物の旧産業奨励館に、平和な未来への思いを伝えてくれるという新たな価値を見出し、それを書き残した楳山ヒロ子さんの日記が、その後の原爆ドーム保存運動のきっかけになるとともに、そのことを学んだ東日本大震災の被害を受けた宮城県女川中学校の生徒たちが、震災遺構の保存に立ち上がった、という物語である。

次に、教材については、平和を願った二人の少女の物語のその後の「ストーリー」（物語）に共通する人々の思いを発見し考えていくようなものとして構想した。具体的には、「サダコの折り鶴」が米国の追悼施設（ニューヨークのグランドゼロにある博物館やハワイのパールハーバー）に贈られているのはなぜか、「被爆した産業奨励館だけが人類の過ちを後世に伝えてくれる」と書き残した「ヒロ子の日記」が、原爆ドーム保存運動のきっかけともなったのはなぜか、を中心教材として取り上げた。

そして、学習活動については、NIEならではの「アクティブ・ラーニング」を重視した。すなわち、「情報の受信」活動では、物語として開発された新聞資料やスライドから、歴史新聞記者の視点から情報を取り出す活動が行われる。「情報の読解」では、新たな価値の創造という視点からの原因分析や「ストーリー」（物語）の解釈が個人・グループで行われる。そして「情報の発信」の活動では、分析・解釈したメッセージを伝える見出し、イラスト、意見や記事内容を考え、それを「はがき新聞」に表現する活動が行われる。

以下に紹介する「希望創造型教材」の授業プランは、日米の小学校の最上級学年で研究授業を実施し、その結果を日米の研究者で批判的に分析・吟味することを通して修正・改善を図ったものである。研究授業の実施は、日本では広島大学附属三原小学校 6 年生の 2 クラス（2019 年 7 月 8 日実施）で、米国ではノースカロライナ州グリーンビル市のエルムハースト小学校（Elumhurst Elementary School）の最上級学年である 5 年生の 2 クラス（2019 年 9 月 16 日実施）で行った<sup>4)</sup>。

### 3. 単元の授業プラン（日本版）～「平和を願った二人の少女の物語－禎子とヒロ子－」～

#### (1) 単元の目標

##### ① 知識・技能

- ・新聞資料やスライドから、平和を願った二人の少女である佐々木禎子と楳山ヒロ子の物語に関する知識を抽出することができる。
- ・抽出した知識をまとめ、発表することができる。

##### ② 思考力・判断力・表現力

- ・禎子の折り鶴が米国の追悼施設に贈られているのはなぜか、その目的や理由を解釈し、表現することができる。
- ・「被爆した産業奨励館だけが人類の過ちを後世に伝えてくれる」と書き残したヒロ子の日記が、原爆ドーム保存運動のきっかけともなったのはなぜか、その思いや理由を考え、表現することができる。
- ・平和を願った二人の少女の物語に共通するキーワードは何かを考え、表現することができる。

##### ③ 学びに向かう力・人間性

- ・「はがき新聞」の作成を通して、平和を願った二人の少女の物語への興味・関心や学習意欲をもち続けることができる。
- ・禎子さんやヒロ子さんに備わっていた「グローバルマインド」「ピースマインド」という人間性や、今日まで続く日米間の平和交流に興味・関心をもつことができる。

## (2) 単元の展開計画の概要 (2時間または1時間+家庭学習)

展開過程	テーマ	主要な問いと活動
導入 (7分)	教材との出会い	<p>○「グローバルマインド」「ピースマインド」とはどのようなものだろう、佐々木禎子さんと楳山ヒロ子さんの物語を通して考えてみよう。</p> <p>○みなさんは歴史新聞記者です。およそ70年前の広島にタイムマシンで移動して、二人に取材をするとしたら、どんなことを聞いてみたいですか。</p> <p>○今日は、二人に取材して考えたことを「はがき新聞」に表現してもらいます。</p>
展開1 (15分)	佐々木禎子さんの物語	<p>○「禎子の折り鶴新聞」とスライドから、折り鶴の少女と言われている佐々木禎子さんの物語を知る。</p> <p>○広島折り鶴の会の少女たちの募金運動によって、禎子さんをモデルとした「原爆の子の像」が作られたことを知る。</p> <p>◎「サダコの折り鶴」が、ニューヨークのグランドゼロにある博物館やハワイのパールハーバーに贈られているのはなぜか、グループで考えてみよう。</p> <p>○米国のオバマ前大統領が平和公園を訪問した際に、4羽の折り鶴を持参したという事実を知る。</p> <p>○歴史新聞記者として当時の禎子さんを取材するとしたら、どんなことを聞いてみたいか、それはなぜか、メモをしておこう。</p>
展開2 (15分)	楳山ヒロ子さんの物語	<p>○「ヒロ子の日記新聞」とスライドから、原爆ドーム保存運動のきっかけとなった日記を残した楳山ヒロ子さんの物語を知る。</p> <p>○「広島折り鶴の会」の少女たちの募金運動によって、原爆ドーム保存運動が動き始めたことを知る。</p> <p>◎「被爆した産業奨励館だけが人類の過ちを後世に伝えてくれる」と書き残したヒロ子の日記が、原爆ドーム保存運動のきっかけともなったのはなぜか、グループで考えてみよう。</p> <p>○ヒロ子さんのことを学んだ宮城県女川中学の生徒たちが、東日本大震災の震災遺構の保存運動を始めたのはなぜか、考える。</p> <p>○歴史新聞記者として当時のヒロ子さんを取材するとしたら、どんなことを聞いてみたいか、それはなぜか、メモをしておこう。</p>
展開3 (8分)	二人に共通する「キーワード」	<p>○二人の平和を願った少女の物語に共通するキーワードを何だろうか。できるだけ多く挙げてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「被爆」</li> <li>・「平和への願い」</li> <li>・「広島折り鶴の会」など</li> </ul> <p>○共通するキーワードが生まれる歴史的背景と要因を、話し合ってみよう。</p>
終結 (45分)	平和を願った二人の少女の物語に関する「はがき新聞」の作成とクラスでの交流	<p>○歴史新聞記者として、佐々木禎子さんと楳山ヒロ子さんの物語を取り上げた「はがき新聞」を個人で作成しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・題字、見出し、イラスト、記事、意見や考えなどを書き込もう。</li> </ul> <p>○作成した「はがき新聞」を発表し、クラスで交流しよう。</p>

#### 4. 単元の授業プラン（米国版）：“The story of two Japanese girls who wanted Peace: Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama”

**Lesson Title:** Let's become a history journalist!

**Date:** September 16<sup>th</sup> or 17<sup>th</sup>, 2019

**Grade:** 5th grade in Elmhurst Elementary School

**Subject:** Social Studies

**Description:** In this lesson, students will learn about the story of two girls, Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama, who wanted peace in the mid-20th century in Hiroshima, Japan. Then, they will think about the historical background of the story and discover some keywords common to the stories of the two girls to create the story of hope. In the end, they will make “the postcard newspaper” about the two girls by themselves.

**Objectives:** As the result of the activity, students will be able to:

1. know about the stories of Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama from a document and a slide.
2. think and recognize the following questions:
  - 1) Why was “Sadako's Folded Crane” given to a war memorial facility in the United States?
  - 2) Why did Hiroko write in her diary that the atomic bomb dome would transmit the humanity's mistakes to future generations?
  - 3) What are the common keywords in the stories of Sadako and Hiroko, such as the “A-bomb survivors”, “Peace creation”, and “Children of the paper crane society”?
  - 4) What is the background of the keywords?
3. have an interest in and learn about “the global mind (the mind for peace)” in the story of the two girls.

#### Procedure:

Theme	Activities	Materials
Encounter with the Instructional Materials	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) The teacher will introduce the stories of two Girls, Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama, who wanted peace, in the mid-20th century in Hiroshima.</li> <li>2) Students will be a history newspaper reporter. They will move back to 70 years ago in Hiroshima, Japan by the time machine.</li> <li>3) Students will collect the news from the two Girls, and make “a postcard newspaper” about them.</li> </ol>	World Map PowerPoint (the Story of Sadako/Hiroko)
The story of Sadako Sasaki	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) The teacher will talk about the story of Sadako. Sadako became a model of “the Children’s Peace Monument”. “Sadako's Folded Crane” was given to the memorial facilities (Grand Zero in New York, or Pearl Harbor in Hawaii) in the United States. The former president Obama brought the paper cranes to the Peace Memorial Museum in Hiroshima.</li> <li>2) Students will think and talk about why “Sadako's Folded Crane” was given to the memorial facilities in the United States.</li> </ol>	PowerPoint Sadako’s Newspaper

The story of Hiroko Kajiyama	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) The teacher will talk about the story of Hiroko. Hiroko's diary triggered the movement of the atomic bomb dome preservation.</li> <li>2) Students will think and talk about why Hiroko wrote in her diary that the atomic bomb dome would transmit the humanity's mistakes to future generations.</li> </ol>	PowerPoint Hiroko's Newspaper
The common keywords in the stories of the two girls	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) Students will discover the common keywords in the stories of the two girls. For example: "A-bomb survivors" "Peace creation" "Children of the paper crane society", etc.</li> <li>2) Students will think about the background of the common keywords.</li> </ol>	
Making "the postcard newspaper" on the story of Sadako/Hiroko	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) Students will make "the postcard newspaper" which covers the story of Sadako and Hiroko.</li> <li>2) Students will write the title, headlines, illustrations, articles and opinions.</li> <li>3) Students will exchange "the postcard newspaper" in a class.</li> </ol>	Worksheet ("the postcard newspaper")

## 5. 「はがき新聞」の考察

実際の研究授業において児童が作成してくれた「はがき新聞」のうち回収できたものは、広島大学附属三原小学校6年生の場合は2クラスで55枚、米国ノースカロライナ州グリーンビル市のエルムハースト小学校5年生の場合も2クラスで44枚であった。

これらを、本授業のパフォーマンス課題であった「はがき新聞」づくりにおいて、「題字、見出し、イラスト、記事、意見や考えの全てが表現されている」を評価規準として分類すると、表1のようになる。なお、全てが表現されている作品の中でも、教材の背景の深い読解（分析・解釈）に基づいた意見や考えが表現されていると考えられるものを、「表現の質が高い作品」として判定した。

表1 評価規準の達成度

	広島大学附属三原小学校6年生	エルムハースト小学校5年生
どれかが不足している作品	4枚（全体の約7%）	15枚（全体の約34%）
全てが表現されている作品 （表現の質が高い作品数）	51枚（全体の約93%） （30枚、全体の約55%）	29枚（全体の約66%） （15枚、全体の約34%）

表1のように、広島大学附属三原小学校の場合は、「題字、見出し、イラスト、記事、意見や考えの全てが表現されているもの」は51枚（約93%）であった。そのうち、表現の質が高い作品と考えられるものが30枚（全体の約55%）あり、児童にとっては深い学びができたと判定できる。一方、エルムハースト小学校の場合は、全てが表現されているものが44枚中29枚（約66%）であった。また、その中で、表現の質が高い作品であると考えられるものが15枚（全体の約34%）であった。

日米でこのような違いが生まれた要因は、なによりも筆者の英語力の低さであるが、それと同時に、6年生と5年生の児童の発達段階、ヒロシマ学習の既有経験の有無があると考えられる。広島大学附属三原小学校の場合は、日常的に国際交流学習や平和学習に親しんでいるのに対して、エルムハースト小学校の5年生の児童の場合は、「ヒロシマ」「原爆」「禎子さんやヒロ子さん」について初め

での学習であった。にもかかわらず、30分程度の時間で約66%の児童が「はがき新聞」を完成させ、全体の約34%が期待以上の質の高い表現であったことは、特筆すべきことではなからうか。その意味では、日米の児童にとっては、深い学びができたと判定できよう。

両校の「はがき新聞」のうち、深い学びと判定できる作品の具体的な見出しをいくつか紹介すると、次のようなものがあった。

#### 【広島大学附属三原小学校の場合】

「二人の願いが未来へ」/「1羽の鶴が世界に伝えた原爆とは」/「原爆ドームが残ったわけ」/「平和を願った二人の少女の物語」/「日記で変わった広島の未来」/「サダコさんの思い、後世へ伝えてゆく」/「平和を願う活動」/「原爆の悲劇から74年 サダコの折り鶴後世へ」/「サダコの思いを受け取った同級生」/「平和を探しもとめた人々」/「貞子さんの折り鶴はなぜアメリカに行ったのか」/「サダコのおりづるせかいへはばたく」/「原爆の悲惨、後世に伝える少女」/「サダコの願いが世界に届く」/「日記が変えた原爆ドームの運命」/「日記が変えた『崩壊の運命』」/「後世に残された二人の願い」/「ヒロ子さんの日記でドームほぞんへ」/「未来の平和を願った少女」/「日記が変えた世界遺産」/「世界にはばたくサダコの折り鶴」/「後世に残した『伝えたい思い』」/「8月6日の悲劇を伝えた2人の少女—ツルや日記に込めた思い—」/「ヒロ子の思い、日記にのせて」/「サダコの折りづる世界へ羽ばたく」

#### 【エルムハースト小学校の場合】

“Sadako died from atomic at young age.”/ “Peace”/ “Two special girls who wanted peace.”/ Help! Two girls died from atomic bomb.”/ “The experience of Sadako”/ “The atomic to peace, the girls wanted only peace.”/ “People still dying from Atomic-bomb”/ “The 2 girls that wanted peace.”/ “Paper Cranes Change The World”/ “Peace girls Sadako Sasaki”/ “Sadako wanted peace.”/ “Sadako wanted to have peace because she was bombed.”/ “Diary of Hiroko Good, Love, Peace, Life, Smiles.”

## 6. おわりに～本研究の成果と課題～

本研究の成果としては、前稿と同様であるが、次の4点を指摘することができる。第1は、日米の10～12歳の児童に対して、共通する内容の研究授業を実施し、「多文化間イシュー教材」の一つとしての「希望創造型教材」による授業の可能性に対する手ごたえを得ることができたことである。第2は、導入部での教材としての「ストーリー」（物語）の主人公との出会い<sup>5)</sup>と問いの発見、展開部での歴史新聞による「ストーリー」（物語）の紹介<sup>6)</sup>と歴史新聞記者としての個人・グループによる背景の読解（分析・解釈）、終結部での「はがき新聞」の作成<sup>7)</sup>とその交流という、NIE学習の基本的な3段階の学習過程と学習活動は、日米に共通して有効であったと判断できたことである。第3は、「はがき新聞づくり」という学習活動は、日米の小学生にとっては初めての経験であったにもかかわらず、30分程度の時間でほとんど全員が作成できるという感触を得られたことである。日米ともに、ほとんどの児童が興味・関心をもって意欲的に学習活動に取り組んでくれた。そして第4は、作成された「はがき新聞」の内容分析から解釈すれば、見出し・イラストの表現や意見・考えの内容を見る範囲内ではあるが、平和を願った二人の少女の「ストーリー」（物語）に込めた「グローバル・パートナーシップ」の重要性に関するメッセージは、日米両国の児童にも十分に受けとめられたと判断できたことである。

残された課題としては、次の2点を指摘することができる。第1は、日米ともに限られた時間での研究授業の実施のため、児童間の交流を通して意見や考えを深める段階までには本年度も至らなかったことである。第2の課題は、70年前の世界・日本・広島 of 歴史的状況に関する学習経験のない米国の10～11歳の児童にとっては、かなり難解な授業であったことである。しかし、授業後の「はがき新聞」の内容や当日のテレビ局のインタビューに答える児童の姿を見る限りでは、伝えようとするメッ

セージはとらえられたように感じた<sup>8)</sup>。

**【附記】** 本稿は、日本学術振興会 JSPS 科研費、基盤研究 (C) (一般) (18K02688) 『『グローバル・パートナーシップ』を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発』(代表:小原友行、2018~2020 年度) の助成による研究成果の一部である。

**【註】**

- 1) 拙稿 『『グローバル・パートナーシップ』を育成する多文化間イシュー教材の日米協働開発～『幕末の日米交流物語—万次郎とマクドナルド—』～』 福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第6号、2020。
- 2) 同上論文、p. 66。
- 3) 3種類の「多文化間イシュー教材」の開発については、次のような計画で研究を進めていった。
  - ・「相互交流型教材」…2018 年度に開発を行い、日本教材学会第 10 回研究発表大会 (2018 年 10 月 21 日、福山大学) で、『『グローバル・パートナーシップ』を育成する多文化間交流教材の日米協働開発～ジョン万次郎とラナルド・マクドナルドの日米交流物語～』として発表。同上論文。
  - ・「希望創造型教材」…2019 年度に開発を行い、全国社会科教育学会第 68 回全国研究大会 (2019 年 11 月 10 日、島根大学) で、『『グローバル・パートナーシップ』を育成する希望創造教材の日米協働開発～平和を願った二人の少女の物語～』として発表。本誌掲載論文。
  - ・「対立・葛藤型教材」…2020 年度に開発し、日本 N I E 学会第 17 回東京大会の研究・実践交流会 (一方向でのネット配信、2020 年 11 月 22 日) で、『『グローバル・パートナーシップ』を育成する N I E 学習教材の開発～『ヒロシマの校庭から届いた絵—本川小学校の物語—』～』として発表。『日本 N I E 学会誌』第 16 号、2021。
- 4) 実際の研究授業では、広島大学附属三原小学校6年生の場合は、1時間 (45分授業) で導入・展開と終結の課題提示までを行い、「はがき新聞づくり」は事後課題学習とした。米国のエルムハースト小学校5年生の場合は、導入・展開を前半の45分で、終結の「はがき新聞づくり」と交流を後半の30分で実施させてもらった。
 

なお、エルムハースト小学校での研究授業の様子については、地元のインターネットテレビ2社による取材が行われ、当日放映された。現在も、下記のアドレスで視聴できる。

  - ・<https://www.wnct.com/features/online-originals/online-originals-elmhurst-elementary-5th-graders-get-history-lesson-from-japanese-professor/>
  - ・<https://www.witn.com/content/news/Hiroshima-University-teachers-lecture-Pitt-County-students-56051745.1.html>
- 5) 導入部の教材との出会いで用意した自作資料 (日本語版・英語版) は、下記のものである。
  - ・「平和を願った二人の少女の物語」…別紙 1
  - ・“The story of two Japanese girls who wanted Peace: Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama”…別紙 2
- 6) 授業の中心的資料として用意した歴史新聞は下記の通りである。(実際は、A4版両面カラー印刷)
 

**【日本の児童用】**

  - ・「禎子の折り鶴新聞」…別紙 3
  - ・「ヒロ子の日記新聞」…別紙 4

**【米国の児童用】**

    - ・“The Sadako’s Paper Crane Times”…別紙 5
    - ・“The Hiroko’s Diary Post”…別紙 6
- 7) 日米の児童が実際に作成した「はがき新聞」の実例を別紙に紹介した。
  - ・はがき新聞例 (広島大学附属三原小学校 6 年生の作品) …別紙 7
  - ・はがき新聞例 (エルムハースト小学校 5 年生の作品) …別紙 8
- 8) 米国ノースカロライナ州グリーンビル市にあるイーストカロライナ大学の歴史クラス (ジョン・タ



ッカー歴史学科教授担当)でも、2019年9月17日に90分で同じ教材による研究授業を実施したが、ヒロシマに関する歴史的背景の理解が深いこともあり、効果的な授業となった。



#### 【本教材開発のための参考文献】

- 1) 源和子『奇跡はつばさに乗って』講談社、2013。
- 2) 佐々木雅弘『禎子の千羽鶴』富山房インターナショナル、2005。
- 3) NHK 広島「核・平和」プロジェクト『サダコ「原爆の子の像」の物語』NHK 出版、2000。
- 4) 那須正幹『折り鶴の子どもたちー原爆症とたたかった佐々木禎子と級友たち』新人物往来社、2010。
- 5) 大牟田稔「平和のとりでを築く」(光村図書小学校教科書『小学6年 国語』) 2014。
- 6) 「原爆ドームの保存と平和への願い」(東京書籍中学校教科書『新しい社会 歴史』) 2015。
- 7) 被爆60周年記念事業・広島平和記念資料館開館50周年企画展「保存から世界遺産へ」  
2005(平成17)年7月11日(月)～12月18日(日)。
- 8) 「サダコの折り鶴 米の追悼施設へ」西日本新聞夕刊、2007年8月18日。
- 9) 「日記が変えた『崩壊の運命』」毎日新聞、2015年1月1日。
- 10) Sui Diccico & Masahiro Sasaki, 'The Complete Story of Sadako Sasaki', Armed with the Arts, Inc., 2018.
- 11) 寺田正弘・中村秀次・吉村勝文『原爆ドームと楮山ヒロ子～ヒロ子の日記と原爆ドームの保存～』  
原爆ドームと楮山ヒロ子の会、2019。
- 12) 「原爆ドーム守った日記の少女を知って」朝日新聞、2020年6月4日。

別紙1 「平和を願った二人の少女の物語」

平和を願った二人の少女の物語		
佐々木禎子さん		楳山ヒロ子さん
1943 (昭和18) 年1月7日生まれる		1943 (昭和18) 年12月生まれる
1945 (昭和20) 年8月6日広島市楠木1丁目の自宅で被爆 (2歳7か月)		1945 (昭和20) 年8月6日広島市平塚町の自宅で被爆 (1歳8か月)
1949 (昭和24) 年4月広島市立鞆町小学校に入学		1959 (昭和34) 年8月6日「あのいたいたしい産業奨励館だけがいつまでも、おそろげん爆を世にうたててくれるだろうか」と日記に書く
1954 (昭和29) 年10月運動会のリレーで1位となる		1960 (昭和35) 年3月中旬、広島市民病院で急性白血病と診断され入院
1955 (昭和30) 年2月21日広島日赤病院に4月入院のまま鞆町中学校に進学する		4月5日16歳で死亡
7月下旬鶴を折り始める		8月28日「広島折鶴の会」は「原爆の子の像」の前で日記を読み、保存運動を開始する
10月25日午前9時57分死亡、12歳		1966 (昭和41) 年7月広島市議会が原爆ドームの保存を決議
11月禎子さんの同級生、募金活動開始		1996 (平成8) 年世界遺産一覧表に登録
1958年5月5日「原爆の子」の像除幕式		
6月映画「千羽鶴」完成、「広島折鶴の会」結成		

別紙2 “The story of two Japanese girls who wanted Peace: Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama”

"The story of two Japanese girls who wanted Peace: Sadako Sasaki and Hiroko Kajiyama"		
Sadako Sasaki		Hiroko Kajiyama
<p>Birthday: January 7, 1943.</p> <p>August 6, 1945, (2 years, 7 months old); she was bombed at home in Kusunoki-cho, Hiroshima (1.7km from the hypocenter)</p> <p>February 21, 1955, she was hospitalized for acute leukemia in Hiroshima Atomic-bomb Hospital.</p> <p>Late July 1955, she began fold paper cranes</p> <p>October 25 1955, 9:57 am, she died of leukemia, 12 years old</p> <p>November 1955, Sadako's classmates started fundraising activities.</p> <p>May 5 1958, unveiling ceremony of "the Children's Peace Monument"</p> <p>June 1958, completed the movie "Thousand Cranes" and formed the "Hiroshima paper crane meeting"</p>		<p>Birthday: December 1943.</p> <p>August 6, 1945, (1 years, 8 months old); she was bombed at home in Hiratsuka-cho, Hiroshima (1.5km from the hypocenter).</p> <p>August 6, 1959, she wrote in the diary, "Only that anthropogenic industry encouragement building will ever give you a slow explosion!"</p> <p>Mid-March 1960, she was hospitalized for acute leukemia in Hiroshima Municipal Hospital.</p> <p>April 16, 1960, she died of leukemia, 16 years old.</p> <p>August 28, 1960, the "Hiroshima paper crane meeting" read her diary in front of "the Children's Peace Monument" and started conservation exercise.</p> <p>July 1966, Hiroshima City Council decided to preserve the Atomic Bomb Dome.</p> <p>1996, it was registered in the World Heritage List.</p>
		
		
		
		



別紙5 “The Sadako” (表面)

**Main article**  
 \* Life of Sadako Sasaki  
 \* Sadako as a model of the Children's Peace Monument  
 \* The editorial: "Sadako's paper cranes to US memorial facility"

**The Sadako's Paper Crane Times**

**MANDAY**  
 September 16, 2019  
 Editor: Tomoyuki Kobara (Fukuyama University)

**Sadako's Paper Cranes go to US Memorial Facilities**  
 The Kindness and Strength to become the final link in the chains of Hatred and Sorrow

**Life of Sadako Sasaki**  
 Sadako Sasaki was bombed when she was two years old at her home in Kusunoki-cho, 1.7km away from the hypocenter. She was exposed to black rain immediately after the bombing, but grew up well and was good at exercising when she was in elementary school. However, she became acute leukemia in February of the sixth grade of elementary school, and died after eight months of hospitalization. Sadako started folding paper cranes with wrapping paper. She folded more and more paper cranes, but the disease did not recover. She took her breath at 8:07 am on October 25, 1955. She was 12 years old.

**Sadako became a model of the Children's Peace Monument. "Sadako's Folded Crane" was given to the memorial facilities (Grand zero in New York, and Pearl Harbor in Hawaii) in the United States. Why "Sadako's Folded Crane" was given to the memorial facilities in the United States?**

**Children's Peace Monument in Peace Park**

**The model of the Statue is Sadako** **The banner is set by student**

**After Sadako passed away, the students of Nebori-cho Junior High School, who were Sadako's classmates at the 6th grade Bamboo class at Nebori-cho elementary school, began to think about what could be done for Sadako and all of children who died in the atomic bomb. And they proposed to make a memorial for all children who died in the atomic bomb. So, they made handmade letters and distributed them to participants at the National Junior High School Principal Conference held in Hiroshima City at that time. On May 5, 1958, the memorial monument named "Children's Peace Monument" was unveiled. This is our cry. This is our prayer. For the sake of peace in the world."**

(裏面)

**The Sadako's Paper Crane Times** **MANDAY, 19th September, 2019**

**Editorial: Sadako's paper cranes to US memorial facilities**

There were the small folded paper crane by Sadako Sasaki in "Tribute WU Visitor Center" in the "Grand zero" in NY and memorial facility in Pearl Harbor in Hawaii. What kind of thought did Sadako who was a true older brother of Sadako give it.

In the afterward of the book of "Sadako and thousand folded paper cranes", Masahiro write the following: "When Sadako was in the hospital, not once did she say, "It hurts," "I'm in pain," or "Help me," but once did she speak with bitterness or hatred toward the atomic bomb or the country that dropped it on Hiroshima.

As the "Goth of Peace" at the Peace Memorial Ceremony, August 6, 2007, the girl of 6th grade elementary school expressed the thought that she heard from Masahiro in school as follows: "The creation of a peaceful world requires that each of us display kindness and strength to become the final link in the chains of hatred and sorrow that we encounter. It is also important that we transcend cultural and historical differences, accept each other, and understand each other's thoughts and feelings." "We can not save the people who suffered on that day, but we can save the people of the future."

We cannot help but hope that such thoughts put in "Sadako's paper crane" will be transmitted to the world

**Books on the Sadako's story**

**Sadako's paper cranes are presented to the memorial facilities in the US**

The paper cranes left at her parents' home are presented to the memorial facilities in the United States by his brother and family.

What kind of wish did the family donate the small crane that Sadako continued to fold without losing hope?

**Paper crane donated to the Pearl Harbor Memorial Facility in Hawaii**

**President Obama visits Peace Park for the first time as an incumbent**

On May 27, 2006, the former US President Obama visited Hiroshima Peace Park for the first time as an incumbent and wrote in his name book "Let's have the courage to pursue a world free of nuclear weapons. And be attached the paper cranes he had folded by himself in it."

別紙6 “The Hiroko's Diary Post”

(表面)

**Main article**  
 \* Life of Hiroko Kajiyama  
 \* Hiroko's diary changed the fate of the Atomic Bomb Dome  
 \* Column: Hiroko's Diary gave the hint for Reconstruction from the Great East Japan Earthquake

**The Hiroko's Diary Post**

**MANDAY**  
 September 16, 2019  
 Editor: Tomoyuki Kobara (Fukuyama University)

**Hiroko's Diary changed the Fate of the Atomic Bomb Dome From Demolition to Preservation, and World Heritage**

It was the diary of Hiroko Kajiyama, who was a high school student at the time, that triggered the Atomic Bomb Dome preservation campaign.

Why did the "Hiroko's Diary", which was written as "Only that painful industry promotion hall (the current A-bomb Dome) will forever devour the terrible A-bomb to future generations trigger the preservation campaign of the Atomic Bomb Dome?"

**Hiroshima Paper Crane Meeting Fundraising campaign started**

In around 1950, weeds were growing around the dome, and cracks were running around the walls of the building. In 1953, small scale collapses and falls continued and became dangerous, so the voice of removal increased. However, at the "Hiroshima Paper Crane Meeting", which forced in June 1953, this diary was inspired by the desire to convey the Atomic Bomb Dome to future generations in order not to repeat Hiroshima. In August 1954, a signing and fundraising campaign for the preservation of the Atomic Bomb Dome started.

**Atomic Bomb Dome (Former Industrial Promotion Hall, World Heritage)**

**Life of Hiroko Kajiyama**  
 At the age of one, Hiroko Kajiyama was bombed with her mother and grandfather at her home in Hiratsuka-cho, Hiroshima, about 1.5km away from the hypocenter. However, fifteen years after the bombing, appealed to the body's sluggishness in mid-1949 when she advanced from the first grade to the second grade of Ositama Gakuen Gion Senior High School, which advanced from Fuchu Junior High School in Fuchu-cho, Iki-gun. As it became weaker day by day, when it was examined at Hiroshima Municipal Hospital, it was diagnosed as acute leukemia. The condition worsened rapidly, and she was admitted to hospital on March 3, 1949, but died suffering on April 5th, five days later. It was a short life of 16 years and 3 months. In the diary of August 6th, the year before Hiroko died, she wrote that "Only that painful industry promotion hall (the current A-bomb Dome) will forever devour the terrible A-bomb to future generations." This description changed the history of peace in Hiroshima.

(裏面)

**The Hiroko's Diary Post** **MANDAY 16th September, 2019**

**From removal to preservation, and registered as a World Heritage Site**

As a result of these movements by children and citizens, in 1956, the Hiroshima City Council decided to preserve the Atomic Bomb Dome. Hiroko's wish to "pass on to future generations" was finally realized.

Later, in order to preserve and inherit the Atomic Bomb Dome, there was a growing demand for registration as a World Heritage Site. As a result of efforts by Hiroshima City, city councils and citizens, etc., in December 1990, the Atomic Bomb Dome was registered as a World Heritage Site.

**[Hiroko in the textbook]**

The story that Hiroko's diary created an opportunity to preserve the Atomic Bomb Dome was published in textbooks.

In the textbook of the language for elementary school sixth graders, "Building a fortress of peace" is one of material (Mitsumura Toshio).

Also in junior high school, social studies, field of history, "Preservation of the Atomic Bomb Dome and a Hope for Peace" has been taken up as the material for the Local history study (Tokyo Shoseki).

**Junior high school students in the Great East Japan Earthquake region learn from the Hiroko's Diary.**

**Column: "Diary of Hiroko became the hint of the Reconstruction after the Great East Japan Earthquake"**

In the corner of Onagawa Junior High School's schoolyard on the hills of Onagawa-cho, Miyagi Prefecture, which was devastated by the tsunami of the Great East Japan Earthquake, there is a "Stone Monument of Onagawa Life" to protect the lives of a thousand years later. It is one of the efforts by students who entered immediately after the earthquake. My were the students able to stand up from the tragedy?

The students have been making four major efforts to "reconstruct" the damage caused by the tsunami. The first is to keep a record of the tsunami as a book. The second is "making a textbook alive". The third is to "make a monument" to protect life. In particular, the fourth idea was inspired by Hiroko's diary, which created the opportunity for the preservation of the Atomic Bomb Dome, a symbol of Hiroshima. (Meeting the life of Onagawa 1000 years later, "Onagawa Life Textbook." 2018, pp.32-33)


The diary of Hiroko Kajiyama, who died at the 16 years old, has been passed down by young people as a story of hope for peace beyond time and place.




別紙8 はがき新聞例 (エルムハースト小学校5年生の作品)

Peace

Sadako Hiroko




There was these 2 girls who wanted peace and they tried ever thing they could to have peace and there names were Sadako and Hiroko who wanted to have some peace so Sadako did funras.ing activites to get Peace in Japan.



Children's Peace Monument

Two girls who wanted peace

sadako died from atomic bomb  
Headline from atomic article  
Cit young age.



Sadako was 1 when the Atomic bomb happened. When she was only 15 she died. she made paper cranes or how medicine she took. Her last word was thank you


Paper Cranes Change The World

Sadako Sasaki

Birth day: Jan 27 1945

Death: Oct. 25 1955

Made 1300 Paper cranes out of medicine wrappers. The last words that came out of her mouth was "thank you". She made history out of Paper Cranes.



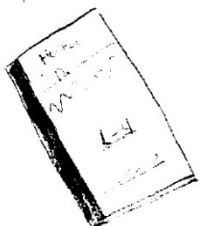
Sadako Sasaki

333

Book Son her t. etc

Sadako's Paper Cranes

After the atomic bomb, she got sick and made thousands of paper cranes out of her medicine papers and sent them to people for peace.



Peace ♡

